

# 明日も元気で来いよ！

## 1月17日 あの日を忘れない

今年もあの日がやってきます。1月17日。阪神淡路大震災から22年目を迎えます。忙しい日常の生活にまぎれて、ともしれば、あの日、あの頃を感じていたこと、考えていたことを忘れかけている自分に気づくことがあります。

明日14日は、土曜授業として保護者や地域の皆様、菅南幼稚園の皆さんも一緒に、避難訓練を行います。

震災の記憶を風化させないためにも、ぜひご参加ください。

毎年、同じ内容ですが、震災当時の思いを心に刻み直す意味で、今年も皆様に、私の体験をお伝えします。

私は、神戸市の長田区に住んでいます。あの日、5時46分。突然の激しい揺れに、自宅マンションは半壊。家具は倒れただけでなく、何かに踏みつけられたように壊れました。壁にはX状の亀裂が入り、家の中は、足の踏み場もありませんでした。幸いにして家族に大きなけがはありませんでした。すり傷程度ですんで、生きているのが不思議なほどの激しい揺れでした。

ここにお示しするのは、震災10年の日に私が記した文章です。少し長くて読みにくいですが、あえて全文を掲載します。

### ■■■■■■■■ おばあさんのやさしさにあまえて ■■■■■■■■

あの日から5日目。1月22日。雨。

私は、自転車に積めるだけの荷物を積んで、神戸市長田区の自宅から、阪急西宮北口駅へ向かった。当時、大阪へ出るためには、その方法が最も確実だった。なんとか無事だった妻子と離れ離れにならなくてはならない。余震はまだ続いている。

もう一度、あのような揺れがきたら、被災した自宅マンション（半壊）は、きっと倒壊するだろう。もう二度と妻子に会えなくなるかもしれない。でも、いつまでも学校を休むわけにもいかない。「後ろ髪を引かれる」などといった言葉ではとうてい足りない。胸がつぶれる思いで自転車のペダルを踏んだ。思い切り踏みつけた。

冷たく、激しい雨が、顔にぶつかってくる。目が痛い。前が十分見えない。

道路は、あちらこちらで陥没している。倒壊した家が道路をふさいでいる。垂れ下がった電線が首にひっかかる。そんな中を、ただただ東へ向かって進むことだけを考えてペダルを踏みつけた。

新神戸駅の南で信号待ちをしたとき。小さなおばあさんが、雨にぬれながら近づいてきた。

おばあさんは、泥だらけのショッピングカートを歩行器のようにして押していた。それがなければ、一人で歩くのもおぼつかないようなゆっくりとした歩みだった。カートの中には、避難所でもらったと思われるジャムパンが3個、雨にぬれていた。

おばあさんは、ずぶ濡れの私を見上げた。そして、だまってパンをひとつ差し出した。私の手は、素直にそのパンを受け取っていた。おばあさんが、不自由な足で、雨の中、避難所へ向向き、やっと手に入れたパン。そのパンを私はひとつもらってしまった。断れば、おばあさんは、もうひとつパンを食べられたのに……。おばあさんのやさしさにあまえてしまった。

2時間半かかって西宮北口駅に着いた。雨に凍えた手で、パンの包装をなんとかして破った。すぐに

パンにかぶりついた。ジャムの甘さが冷え切った私の体の中を温かくしみとおった。涙が出てしかなかった。

阪急電車で梅田に向かった。車窓から見える街は、東へ進むにつれて倒壊した家が減ってきた。

梅田に着いた。街はいつも通りだ。普段の街を 普段の服装で、何事もなかったかのように人々が行きかう。お店も普通に営業している。

ほんの30分前。ずぶ濡れの私は、おばあさんからもらったジャムパンを涙しながらほおぼっていた。被災した街では、誰もが、コップ1杯の水、一個のパンにも生きることの意味を考えさせられている。自分がいた世界とあまりにちがう。この違いはなんだ。こみあげるものがあった。怒りでもない。悔しさでもない。安堵でもない。あの感情はなんだだったのか。

あれから10年。あのときの思い。

家族を思う心。人々のやさしさ。ひとつのパン、一杯の水にも生きることの意味を感じた心。

絶対に忘れない。忘れてはいけない。

## おまもり しなないでね



これは、娘が私に作ってくれたお守りです。

娘は、震災当時、小学校1年生でした。あの揺れが起きたとき、娘は、まだ布団の中でした。その娘に、和だんすが、倒れていきました。私は、となりの部屋にいました。助けに行こうとして、必死にもがきました。でも、激しい揺れのため、どうしても娘の布団に行けません。わずか3メートルの距離が進め

ないのです。息が止まる思いで、ただただ、その様子を見ているしかなかったのです。揺れが少しおさまって、娘のふとんに飛びつきました。幸い、娘は、倒れたたんすのすき間にいて、無事でした。あと数センチでも、位置がちがったら・・・と思うと、今も息ができなくなるような苦しさを感じます。

あの日から、5日目。私は、雨の中、単身、大阪へ向かいました。いよいよ出発というときに、娘が黙ってわたしてくれたのが、このお守りです

【「死なないでね」というメッセージが「しなないでね」になっています】

震災発生直後から、ラジオやテレビは、容赦なく、人々の死や別れといった情報を流し続けました。そんな中、娘は、娘なりに、幼い心の中で、家族の死や別れというものに向き合っていたのでしょ。私と離れるとき、娘は、何も言いませんでしたが、その胸中を思うと、胸が熱くなります。

娘は、今年29歳になります。このお守りについては、何もいいません。でも、娘の心には、言葉にできない大切な何かがしっかりと刻み込まれていると思います。

わたしは、このお守りを常に持ち歩いています。困ったときには、娘が守ってくれているような気がしています。



自分の大切な人が そばにいてくれる  
大切なものが そこにある  
当たり前のような日常が、実は、当たり前でなく、  
本当に貴重な一瞬の積み重ねなのです。  
今年も そのことを自分に言い聞かせています。